

[シンポジウム1]

順天堂第二代堂主佐藤尚中の生涯と事績

澤井 直

順天堂大学医史学研究室

順天堂第二代堂主佐藤尚中（さとうたかなか、1827-1882）の活動は、時期・場所から大きく3つに分類することができる。門人だった長谷川泰らが幹事となって谷中霊園に建てられた顕彰碑の冒頭の「国家中興し仁術を崇尚し名医を訪求して佐倉の佐藤先生首めて其の選に膺。擢じて陪臣自り大博士兼大典医と為る。世を挙て伝称す。然れども先生の志は榮達に在らず。職を辞して家居し病院を開き生徒を養い、其の道を振起す。」という文に書かれているように以下のような変遷があった。

1. 幕末に順天堂で活動。佐倉藩藩医としても活動
2. 維新直後に大博士として大学東校で活動。大典医も兼ねる
3. 練塀町・湯島の順天堂での活動

佐藤尚中の事績は大学東校の後身にあたる東京大学関連の歴史や佐倉藩・千葉県などの歴史などでも扱われてきたが、特に大学東校時代の尚中に関する記載は乏しい。この時期も含めて順天堂編集・発行による『順天堂史 上』（1980）が詳しい。

【佐倉藩での活動】

尚中は小見川藩主の侍医の子として生まれ、江戸薬研堀の和田塾に入門し、順天堂初代堂主佐藤泰然の教えを受けた。泰然が佐倉に移って順天堂を開くのに同行し、研鑽を積み、泰然の養子となる。その頃に行なった外科手術の記録や蘭書翻訳が残っている。

開国後、ポンペから教えを受けるために約1年長崎に遊学し、佐倉に戻ったあとは順天堂を率い、治療の現場に立つとともに、多くの門人を育てる。同時に藩医としての活動も拡大していった。藩の医学所での教育を蘭医中心へと変え、西洋医術を施して藩民の病苦を救うために佐倉養生所を設けるなど、佐倉藩の医制の改革を行なった。

【東校での活動】

維新後、尚中は明治政府に登用され大学東校のトップとなり、学生の教育および全国的な教育行政に関わるようになる。この頃の大学東校はドイツ医学採用が決定→ドイツ人医師の来日を待つ時期にボードインやその他の外国人教師が指導→ミュルレルとホフマンが来日後は東校（大学東校から改称。その後も幾度か改称がなされた）の教育の全権を握る、という教育状況が目まぐるしく変転する時期だった。

尚中は短期間で医師を育成する変則生徒教育を重視し、その存続を主張した。ミュルレル、ホフマンの帰国後に定められた東京医学校の通学生（別課生）の制度が西洋医不足に対処する役割を持っていたように、尚中は早くから医師の速成教育の必要性を理解していた。しかし、両ドイツ人教師は変則生制度の廃止を決め、教育において尚中の願いを実現することは難しかった。

それでも病者の治療・救済機関の充実への熱意は冷めなかった。東校付属の施設を「病院」から「医院」へ改称し、治療を主とする私立の博愛社医院を作って、広く病人の治療を心掛けた。

【練塀町・湯島の順天堂での活動】

明治6年に尚中は校長の座を長谷川泰に譲って官職を辞し、練塀町に順天堂を開く。充実した施設と人員を備える病院だった。しかし、病人の収容のための病室が足りなくなり、また多くの患者が訪れたため、増築を行なった。増築してもまだ不十分だったため、湯島の現在の地へと移転する。その後は病気がちとなるが、内科を主に受け持ち、外科を受け持った後継ぎの三代目堂主の佐藤進とともに近代的な私立医療機関としての順天堂の礎を築いた。